

高麗川の虫たち



みなさんは高麗川をご存じですか？ふるさと坂戸を流れるこの川は、県下有数の清流であり、わたしたちにとってかけがえのない財産といえます。

そして高麗川は、ただ単に「清流」という言葉では言い尽くせないほどの、たくさんの魅力に満ちあふれています。それは、市街地のすぐそばを流れる川とは思えないほどの、自然の豊かさです。高麗川ではたくさんの昆虫や魚、野鳥などを観察することができます。チョウについて言えば、年間をとおして毎年50種類以上観察することができます。その中には、ウラゴマダラシジミやヒオドシチョウなど、埼玉県レッドデータブックに記載されている貴重な種類も多く含まれます。

さて、ほとんどのチョウは、幼虫の時期に植物を食べて成長しますが、それぞれ食べる植物の種類が異なります。つまり、チョウの種類が多ければ、それだけ植物の種類も多いということになり、植物の種類が多い分、より複雑な生態系を形作っている、と考えられます。このことは、チョウだけでなく、他の昆虫や魚、野鳥など生き物全般にいえることだと思えます。

この素晴らしい自然を保全していくために、私たちはどうすればいいのでしょうか？それには、まず高麗川の自然の豊かさを知ることだと思えます。さあ、手始めにこの冊子を持って、高麗川を歩いてみましょう。きっと、宝石のような美しい虫たちに出会えることでしょう。



春

こまがわ はる すがた
高麗川で、春まっさきに姿を見せるチョウはモンキチョウです。そのあとモンシロチョウやスジグロシロチョウ、
ベニシジミなどいろいろなチョウが飛びはじめますが、はる こまがわ だいひょう
春の高麗川を代表するチョウといえば、やはりツマキ
チョウでしょう。なぜなら、た るい はる あき なが きかんかんさつ
他のシロチョウ類は春から秋まで長い期間観察できるのに対し、ツマキチョウの
せいちゅう はる いちじき すがた み
成虫は、春の一時期しか姿を見せないからです。

はる
そして、春のチョウがひとつとおり すがた み こまがわ なかま そくそく うか はじ
姿を見せたころ、高麗川ではサナエトシボの仲間が、続々と羽化を始ま
す。



モンキチョウ

こまがわ はや とし がつ
高麗川では早い年だと 2月
の初めにはせいちゅう すがた み
成虫が姿を見
せます。

はくしよくがた はね
メスは白色型といって翅の
いろがオスに比べて白っぽい

こたい おお
個体が多いのですが、なか

きいろがた おな
には黄色型といってオスと同

きいろ こたい
じ黄色の個体もいます。





ツマキチョウ

成虫は春しか姿を見せません。春に羽化した成虫はすぐに卵を産み、孵化した幼虫は成長し蛹になります。そのまますま夏・秋・冬を蛹のまま過ごし、翌年の春に羽化するからです。

幼虫は、シヨカツサイなどの野生のアブラナ科の植物を食べて成長します。チョウの幼虫はふつう植物の葉を食べますが、ツマキチョウの幼虫は、花や実も食べます。



ツマキチョウ幼虫



ツマキチョウのメスは、翅の先まで白く、黄色い部分がありません。オス、メスともに裏面の網目模様が特徴です。

モンシロチョウ



モンシロチョウとスジグロシロチョウは、^{おな}同じシロチョウ科のチョウでアブラナ科の^か植物を食草として^{しよくぶつ}いますが、モンシロチョウの方がキャベツやダイコンなどの^{さいばいしよくぶつ}栽培植物を好むの



^{たい}に対し、スジグロシロチョウは野生の^{やせい}アブラナ科の植物を^か好みます。

スジグロシロチョウ

^{はる}春の高麗川では、モンキチョウ・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウと、^{せいちゆう}成虫で越冬したキタキチョウを加えてシロチョウ科のチョウを5種類観察できます。そのなかで、モンキチョウのメス(白色型)・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウの4種は、^{しゅ}飛んでいるときは、^{はね}みな翅が白く見えるので、なかなか^{みわ}見分けが付きません。みんなひっくるめて「モンシロチョウ」と思っている人が多いのではないのでしょうか？
^{いちど}一度チョウが止まっているところを、よく^{かんさつ}観察してみてください。それぞれ^{とくちよう}特徴があるので、ちゃんと^{くべつ}区別することができます。

シジミチョウのなかまも春の早い時期から羽化します。高麗川では、ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・トラフシジミ・コツバメの6種が観察できますが、コツバメは城山橋より下流では見たことがありません。



ベニシジミ

春から秋にかけて何度か羽化を繰り返しますが、春に羽化した個体の翅の赤が一番鮮やかに見えます。



ツバメシジミ

高麗川では、普通に見られるチョウです。オスの表面がメタリックブルーに輝くのが印象的です。



ヤマトシジミ

食草はどこにも見られる雑草のカタバミなので、高麗川だけでなく市街地でも普通に見られます。どこにも見られるチョウだからといって、馬鹿にしないでください。よく見れば翅は美しいし、オス・メスとも季節により翅の装いが変化します。



トラフシジミ

トラフシジミは、^{はる}春に羽化する^{うか}個体と
^{なつ}夏に羽化する^{こたい}個体で色合いが^{いろあ}だいぶ
^{ちが}違います。

でも、^{もよう}模様は^{おな}同じです。



ルリシジミ

^{こまがわ}高麗川では、ヤマトシジミやツバメシ
 ジミに^{くら}比べて、^{こたいすう}個体数は^{すく}少ないよう
 です。

^{しゃしん}写真のように^{はね}翅を^{ひら}開いて^と止まること
 は、めったにありません。



コツバメ

^{せいちゆう}成虫は^{はるさき}春先しか^{すがた}姿をあらわしません。

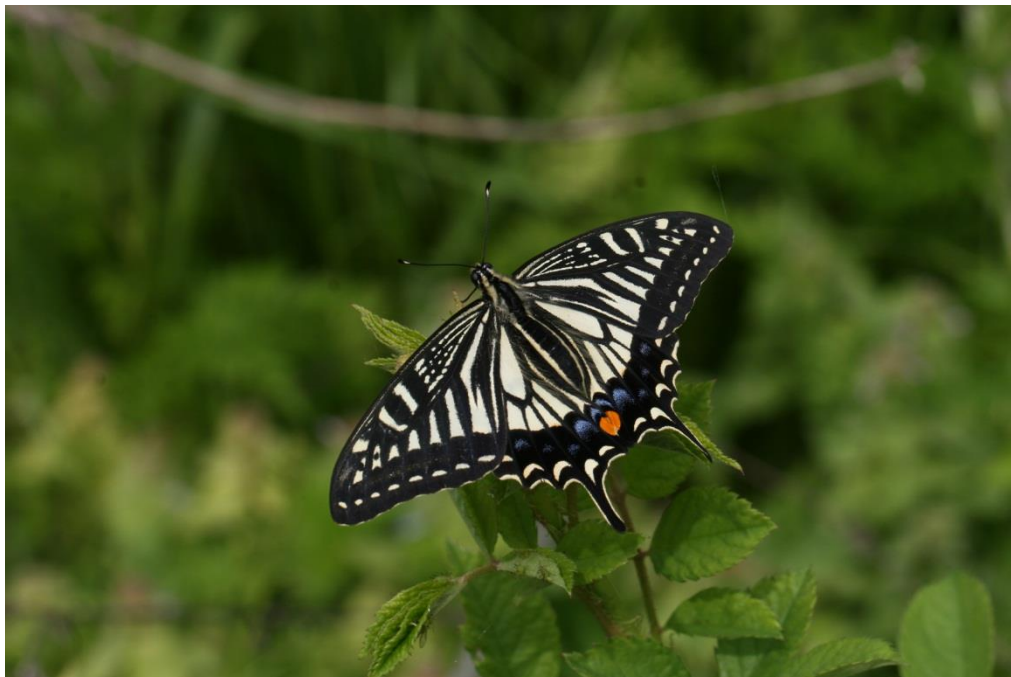
^{ねん}1年のうち、ほとんどを^{さなぎ}蛹で^す過ごしま
 す。

^{さいたまけん}埼玉県レッドデータブックで「**準絶滅**

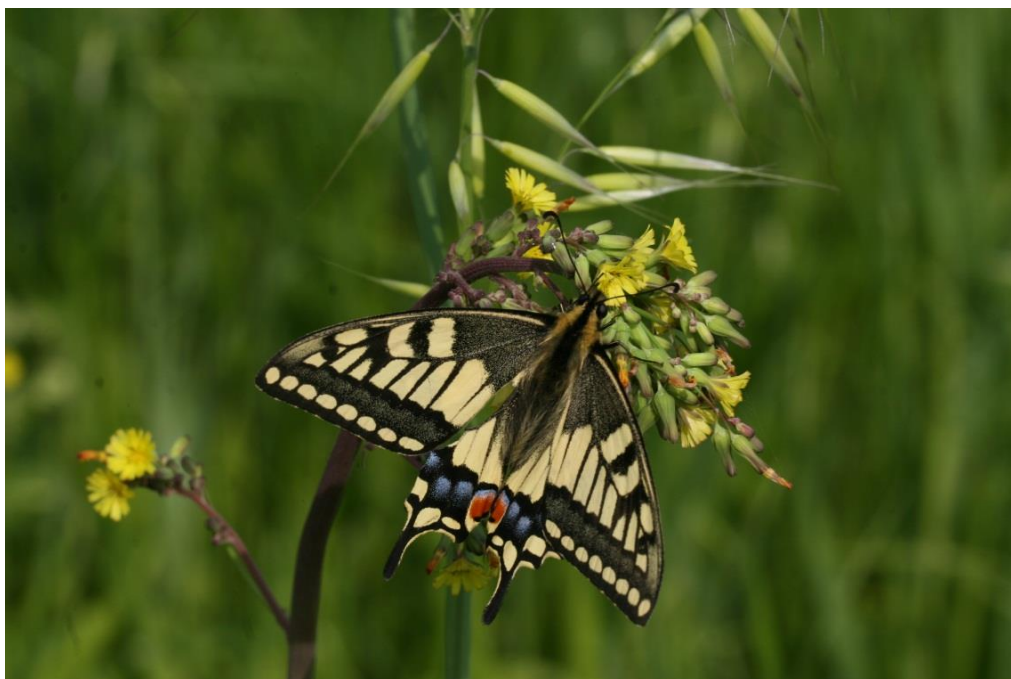
危機」に指定されています。

アゲハチョウの仲間なかまは、モンキチョウすこやベニシジミおくなどより少し遅れて姿すがたをあらわします。

高麗川こまがわでは、アゲハチョウ・キアゲハ・ジャコウアゲハ・クロアゲハ・アオスジアゲハが普通ふつうに見られ、まれにカラスアゲハ・モンキアゲハ・ナガサキアゲハみも見られます。また、ウスバシロチョウは、春はるしか姿すがたを見せません。

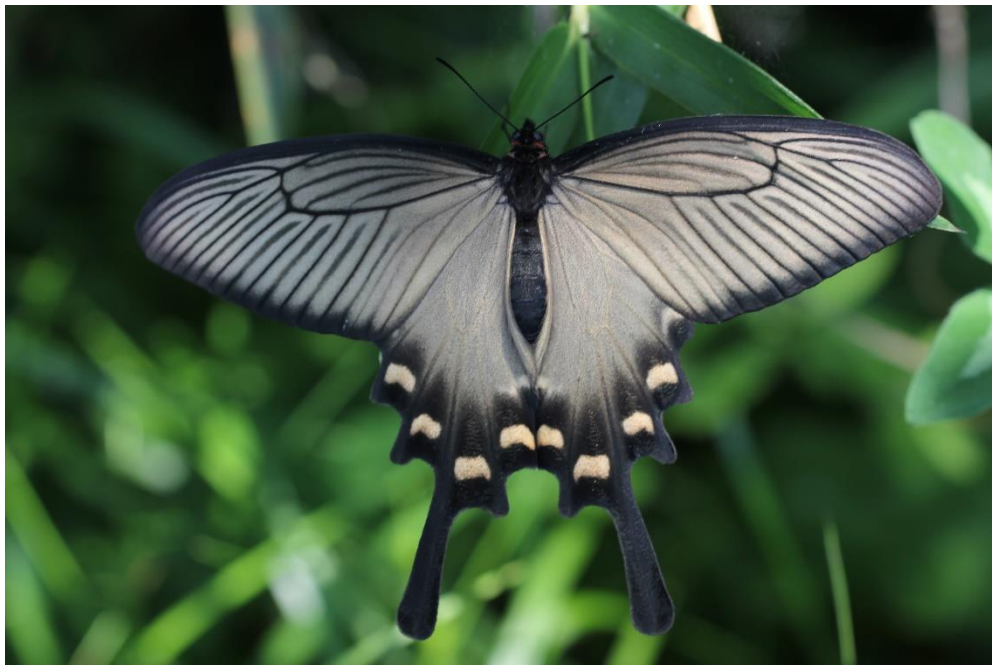


アゲハチョウ



キアゲハ

アゲハチョウの仲間なかまは、春はるに羽化する個体うかと夏なつ以降おおに羽化する個体こたいで、大きさに違いちががある種類しゅるいが多いよう
です。春はるに羽化する方が小さく、夏なつの大きな個体こたいと比べると、まるで別種べっしゅに見えるものみもあります。



かんきょうがっかん さくらちゅう
環境学館いずみと桜中

さかいの境のフェンスに、しよくそう
食草のウマノズクサが生えて
おり、まいとし毎年そこで発生を繰
り返しています。

ひだり しゃしん
左の写真はメスで、オス
はぜんたいにくろはね
は全体に黒っぽい翅をして
います。

ジャコウアゲハ



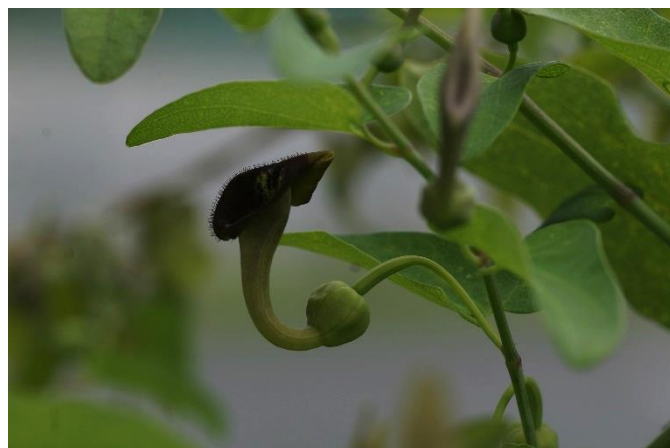
たまご
卵



ようちゅう
幼虫



さなぎ
蛹



ウマノズクサの花
はな



ウスバシロチョウ

なまえ
名前はシロチョウです
が、アゲハチョウの
なかま
仲間です。このチョウ
は1年のほとんどを卵
で過ごし、成虫は春し
か姿を見せません。



ウスバシロチョウの卵です。食草はムラサキケマンで
すが、4月の早い時期に成長を終え、ウスバシロチョ
ウが産卵する5月には、地上から姿を消してしまいま
す。そのため、ウスバシロチョウは来年ムラサキケマン
が芽を出しそうな場所の近くの、地面に落ちている木
の枝などに産卵します。



ギンイチモンジセセリ

セセリチョウの仲間^{なかま}は地味な種類^{じみ しゅるい}が
 多く^{おほ}、ガの仲間^{なかま}と勘違^{かんちが}している人もい
 るようですが、チョウの仲間^{なかま}なのでお
 まちが^{まちが}間違いなく。

表面^{ひょうめん}は、こげ茶色^{ちやいろ}一色^{いつしよく}の地味^{じみ}で
 目立^{めだ}たないチョウ^{りめん}ですが、裏面^{うら}は

名前^{なまえ}のとおり銀^{ぎん}の一文字^{いちもんじ}が鮮やか^{あざ}かで
 す。埼玉^{さいたまけん}県レッドデータブックで

「準絶滅危惧^{じゅんぜつめつ きぐ}」に指定^{してい}されています。

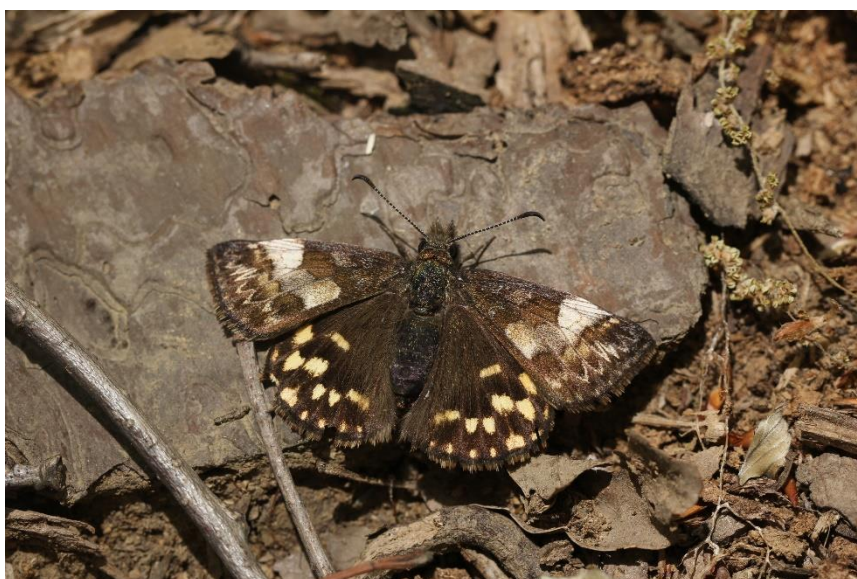
夏^{なつ}にも羽化^{うか}しますが、残念^{ざんねん}ながら裏^{うら}
 の銀^{ぎん}一文字^{いちもんじ}が目立^{めだ}たなくなります。



ミヤマセセリ

名前^{なまえ}に「深山^{みやま}」とついでいますが、深^{ふか}
 い山^{やま}に行かなければ見^みつからないわ
 けではなく、平地^{へいち}にもいます。成虫^{せいちゆう}は
 春先^{はるさき}しか姿^{すがた}をあらわしません。

埼玉^{さいたまけん}県レッドデータブックで「絶滅^{ぜつめつ}
 危惧^{きぐ} | A類^{るい}」に指定^{してい}されています。





こまがわ ^{はる} 高麗川では、春になるとホンサ
ナエやアオサナエ、ヒメサナエ、
オナガサナエなどサナエトンボ
なかま ^{そくそく} ^う ^か ^{はじ}
の仲間が続々と羽化を始めま
^{ていぼう} ^{うえ} ^{ゆうほどう}
す。堤防の上の遊歩道ではなく、
なるべく川に近いところを歩く
^{かわ} ^{ちか} ^{ある}
と、足元の草むらから、羽化し
^{あしもと} ^{くさ} ^う ^か
たばかりの個体がふわふわと
^{こたい}
飛び立つのを観察できます。



夏

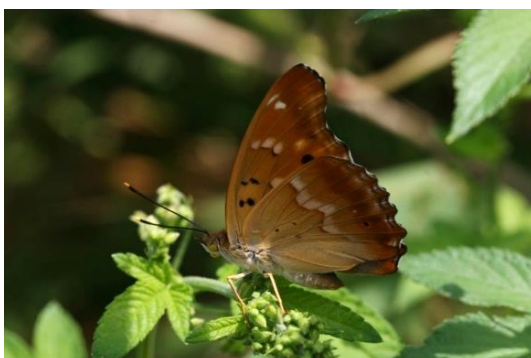
こまがわ なつ むし てんごく にんげん あつ なつ からだ むし
高麗川の夏は、まさに虫たちの天国です。人間にとって暑い夏は体にこたえますが、虫たちにとってはなんでもないので、さまざまな昆虫が活発に活動します。

なつ こまがわ だいひょう とざんどうとちゅう さわぞ
さて、夏の高麗川を代表するチョウといえば、コムラサキがあげられます。コムラサキは登山道途中の沢沿いでよく見かけるので、山のチョウという印象が強いのですが、高麗川の河畔林にはコムラサキの食樹であるヤナギの仲間がたくさん分布しているため、平地でも普通に見ることができるのです。



コムラサキ

こまがわ おつへがわ ひろ ぶんぶ かず おお こうせん かくだ むらさきいろ
高麗川から越辺川にかけて広く分布しますが、数は多くありません。光線の角度によって、オスは紫色に輝きます。メスは残念ながら輝きません。



こんちゅう あし ほん ひだり しゃしん ほん
昆虫の足は6本ですが、左の写真では4本にしか見えません。じつはコムラサキに限らず、タテハチョウ科のチョウは前足が退化しているため、4本に見えるのです。



ウラゴマダラシジミ

ていほく しよくじゆ
低木のイボタノキが食樹ですが、
こまがわ かはんりんない ひかくてきおお
高麗川の河畔林内には比較的多い
ので、ウラゴマダラシジミも普通ふつうに
かんさつ はな
観察できます。イボタノキの花によく
あつ めあ
集まるので、イボタノキを目当てにす
れば見つかると思います。埼玉県レッ
ドデータブックで「ぜつめつ きく絶滅危惧ⅠA類」に
してい
指定されています。



アカシジミ

しよか そうきばやし み
初夏にクヌギやコナラの雑木林で見
かけるチョウです。高麗川の河畔林で
もクヌギやコナラは分布ぶんぷしており、ア
カシジミも見るができます。早朝
はやし したくさ
は林の下草したくさにおりていることがあり
ますが、ひのほが昇ると樹上じゆじように移うつってしま
うので、見つけにくくなります。



ウラナミアカシジミ

どうよう こまがわ かはんりん
アカシジミ同様、高麗川の河畔林で
み うら ふくざつ もよう
見られます。裏の複雑なゼブラ模様
とくちよう
が特徴です。



ミズイロオナガジミ

このチョウもアカシジミ、ウラナミアカシ

ジミ同様、^{どうよう} 雑木林のチョウです。いずれ

も成虫は初夏の^{せいちゅう} 一時期しか見られず、

^{いちねん} 一年のほとんどを^{たまご} 卵の状態^{じょうたい} で^す 過ごしま

す。



トラフジミ

はる^{はる} 春に羽化^{うか} した^{こたい} 個体^{くら} (6ページ)と比べて

みてください。^{とらふ} 虎斑^{もよう} の模様は^{いっしょ} 一

も、^{ぜんたい} 全体^{いろあ} の色合^{ちが} いが^{ちが} 違います。



キタキチョウ

なつ^{なつ} 夏と秋^{あき} に羽化^{うか} します。モンキチョウ^{おな} と同

じく、^と 止ま^{かなら} っているときは^{はね} 必ず^と 翅を閉じ

ているので、^{ひょうめん} 表面^と は飛^{とき} んでいる時^{とき} しか

^み 見^み られませ^{せん} せん。

^{ひだり} 左^{みぎ} がオス、右^{みぎ} がメスです。



ヒメウラナミジャノメ

はる ^{うか} 春にも羽化しますが、夏 ^{なつ} の方が数 ^{かず} が多 ^{おお} いです。夏 ^{なつ} に高麗川 ^{こまがわ} を歩くと、このチョウ ^あ がどこにでもいて、目障り ^{めざわ} なくらいです。



ヒオドシチョウ

しよか ^{うか} 初夏 ^{かつどう} に羽化し、しばらく活動 ^{あと} した後、い ^ま つの間にかいなくなります。(どこかで ^{きゅうみん} 休眠 ^し しているらしい)
つぎ ^{すがた} 次 ^み に姿 ^{よくねん} を見せるのは、翌年 ^{がつ} の3月 ^さ くらい ^{さいたまけん} になってからです。埼玉県 ^{ぜつめつ きく るい} レッドデー ^{してい} タブックで「絶滅危惧Ⅲ類」に指定 ^{して} されています。



ウラギンヒョウモン

ヒョウモンチョウ ^{なつ} というと夏の高原 ^{こうげん} を ^{れんそう} 連想 ^{すく} してしまいますが、このチョウは少 ^{こまがわ} ないながらも高麗川 ^{せいそく} に生息 ^{して} しています。
^{さいたまけん} 埼玉県 ^{ぜつめつ きく るい} レッドデー ^{して} タブックで「絶滅危惧ⅠA類」に指定 ^{して} されています。



ゴマダラチョウ

はる ^うか なつ ^{ほう}
春にも羽化しますが、夏の方が

こた ^いすう おお ^{なつ} ^{じゅえき}
個体数が多いようです。夏は樹液に

あつ ^み
集まるところをよく見ます。



アカボシゴマダラ

ほう ^{ちよう} ^{ほんらい} ^{ぶんぶ}
放蝶により、本来は分布しないはず

かん ^{とう} ^{ちほう} ^{ふつう} ^み
の関東地方でも普通に見られるよう

になってしまいました。食樹が在来種

のゴマダラチョウと同じエノキなので、

き ^{よう} ^{ごう} ^{しんばい}
競合が心配されます。



アサマイチモンジ

こ ^ま ^{がわ}
高麗川では、イチモンジチョウという

そっくりさんもありますが、アサマイチモ

ンジの方が数は多いようです。

さい ^{たま} ^{けん} ^{じゅん} ^{ぜつ} ^{めつ}
埼玉県レッドデータブックで「準絶滅

き ^ぐ ^{してい}
「危惧」に指定されています。



アオスジアゲハ

しょくそう しょくじゅ こうえん がいろじゅ う
食草(食樹)が公園や街路樹に植

えられているクスノキなので、高麗

がわ 川だけでなく街中でも観察できます。

はる 春にも発生しますが、個体数は少

ないようです。



ゴイシジミ

こがた 小型のシジミチョウでかわいらしい

いんしょう 印象ですが、幼虫はチョウには珍

しい肉食です。埼玉県レッドデータ

ブックで「準絶滅危惧」に指定され

ています。



ようちゅう 幼虫はササの葉につくアブラムシ

を食べてます。

ゴイシジミ幼虫



アオハダトンボ

こまがわ なつ
高麗川では、夏になる
とハグロトンボ^{まいとし}が毎年
たくさん^{はっせい}発生しますが、
ハグロトンボに^{さきが}先駆け
て、晩春から初夏に
かけてアオハダトンボ
が^{すがた}姿を見せます。体^{からだ}
全体が金緑色に輝

とく はね かがや さいたまけん
き、特にオスは翅まで輝きます。埼玉県レッドデータブックで「**絶滅危惧II類**」に指定されています。



ホンスナエ

まいとしろやまぼししゅうへん
毎年城山橋周辺で、アオサナエ
とともに飛んでいるのを観察でき
ます。^{さいたまけん}埼玉県レッドデータブックで
「**絶滅危惧II類**」に指定されてい
ます。



ヒメサナエ

なかま
サナエトンボの仲間では、オジロ
サナエとともに^{ちい ほう}小さい方です。
^{さいたまけん}埼玉県レッドデータブックで
「**準絶滅危惧**」に指定されていま
す。



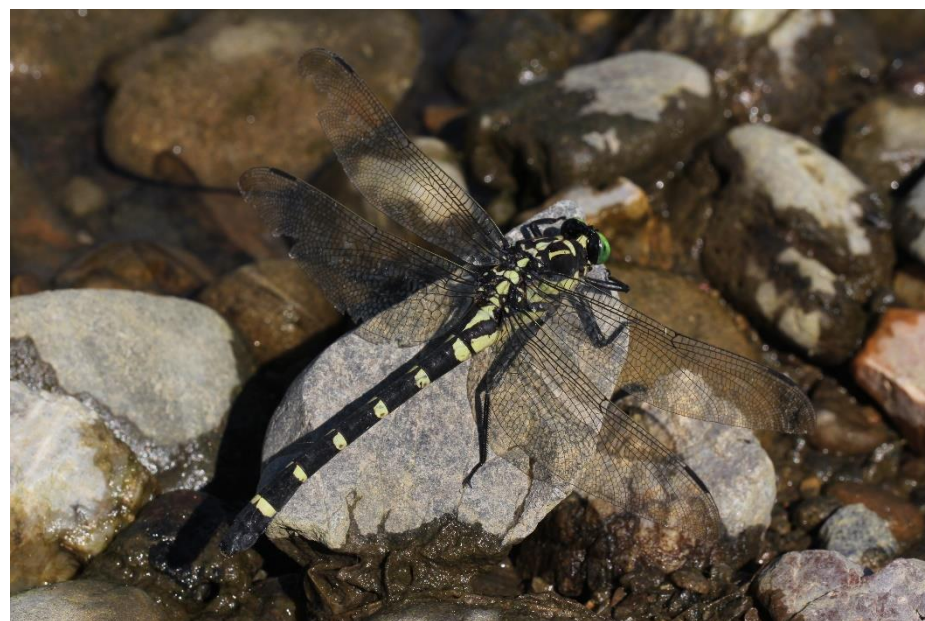
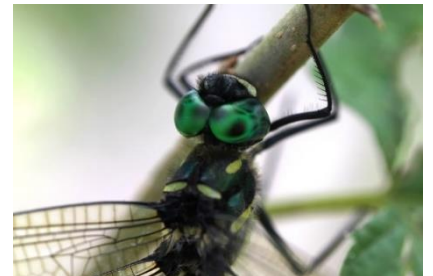
サラサヤンマ

こまかわ ひろ ぶんぶ
高麗川に広く分布して
いますが、どこにでもいるわけでは
ありません。埼玉県レッドデー
タブックで「準絶滅危惧」に指定
されています。



コヤマトンボ

ひだり うか みせいじゅく
左は羽化してまもない未成熟
の個体です。成熟すると、下の
しゃしん ふくがん いろ きん
写真のように複眼の色が金
緑色に変わります。



コオニヤンマ

なまえ
名前にヤンマがついています
が、サナエトンボの仲間です。
こまかわ ふつう み
高麗川では普通に見られます。
うし あし ひじょう なが とくちょう
後ろ足が非常に長いのが特徴
です。



オニヤンマ

にほんさいだい
日本最大のトンボ
です。こまがわ
高麗川では
あまりみ
見かけませ
んが、すうねんまえ
数年前、い
つのかかんきょう
つまにか環境
がつかん
学館いずみに
しんにゅう
侵入してきて、おどろ
驚
かされたことがあ
ります。



なつ お
オニヤンマは、夏の終わりに産卵
します。さんらん ほうほう ごうかい
産卵の方法は豪快で、
すいめんじょう せいし
水面上に静止し、そこから水面
か だろ なか いっき どうたい つ
下の泥の中まで一気に胴体を突
きさ
刺し、さんらん
産卵します。





ハラビロトンボ

トンボの仲間は、オスとメスで色合いが違う種類が結構います。このトンボもシオカラトンボと同様、メスは「麦わら色」、オスは左の写真のように「シオカラ色」です。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。



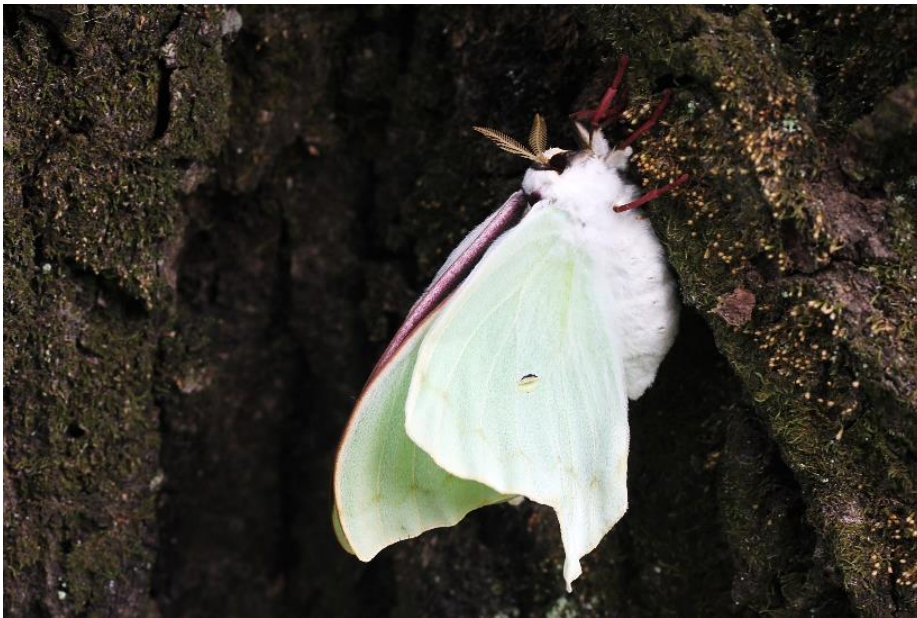
ウスバキトンボ

このトンボは、遠い南の国から発生を繰り返しながら、北へ向かって分布を拡げていく習性を持っています。でも、冬の寒さに耐えられず、関東地方では越冬できません。それでも、毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市あたりでは、6月下旬～7月に姿を見せます。



ハグロトンボ

高麗川の夏を代表するトンボです。アオハダトンボが姿を消した頃に姿をあらわします。その後だんだん数を増し、夏の間さまざまところで飛んでいるのを見かけます。写真は左がオス、右がメスです。



オオミスアオ

いっばんてき なかま 一般的にガの仲間は、チョウに比
べていやな印象を持っている方
が多いようですが、よく見ると美
しい種類がたくさんいます。オオ
ミスアオも、はっとするような鮮
やかな水色の翅をもった、美し
いガです。



ヒガシキリギリス

さいたまけん 埼玉県レッドデータブックで
「準絶滅危惧」に指定されていま
す。高麗川を歩いていると、チョ
ン・ギースという鳴き声をあちこ
ちでよく耳にします。けれども草
むらに隠れているため、めった
に姿を見せることはありません。



ニイニゼミ

こまがわ 高麗川では、毎年最初に鳴き声
を聞くゼミです。早いときは6月
の下旬から鳴き始めます。
みこと 見事な保護色で私たちの目をく
らませます。



アブラゼミ

ニイニゼミが鳴き始めてしばらくすると、ミンミンゼミとともに鳴きだし、夏の間高麗川をにぎわせてくれます。



ミンミンゼミ

アブラゼミと同様夏の間うるさいくらい鳴いています。高麗川だけでなく、市内各地で声が聞こえます。



ヒグラシ

ひるまはあまり鳴き声を聞きません。朝早くか夕暮れにカナカナ…と美しい声を聞かせてくれます。市内の各所にいますが、ミンミンゼミやアブラゼミに比べて数は少ないようです。でも、城山にはたくさんいます。



ツクツクボウシ

いちばんさいご 一番最後に現れ、いちばんさいご 一番最後まで
 な 鳴いているセミです。こ 子どもの頃、
 ここのセミのこえ きを聞くと「ああ、なつやす
 みももうおわりだな」とかん 感じた人
 おお も多いのではないのでしょうか。



ノコギリクワガタ

ぞうきばやし 雑木林のコナラやクヌギなどの
 じゅえき あつ 樹液に集まりますが、こまがわ 高麗川では
 かはんりん やなぎ じゅえき み 河畔林の柳の樹液でよく見られ
 ます。やなぎ じゅえき 柳の樹液には、コクワガタ
 やカブトムシなどのほか ほか こうちゆう 甲虫だ
 けでなく、さまざま こんちゆう あつ 様々な昆虫たちが集
 まります。



さて、した しゃしん おな 下の写真も同じノコギリク
 ワガタですが、うえ しゃしん くら 上の写真と比べて
 みてください。まるでべっしゅ おも 別種と思わ
 れるぐらい、おお けいじょう ちが 大あこの形状が違
 っています。このけいこう た 傾向は、他のク
 ワガタムシもどうよう おお 同様なものが多く、
 たいけい だいじょう おお オスの体形の大小により、大あ
 このけいじょう ちが 形状が違います。



ツボト

なまえ
名前にトンボがついていますが、ト
ンボの仲間ではありません。

どちらかというトウバカゲロウの

なかま ちか なが しよっかく とくちよう
仲間に近いです。長い触覚が特徴
です。

うえ した
上がオス、下がメスです。



ナナフシ

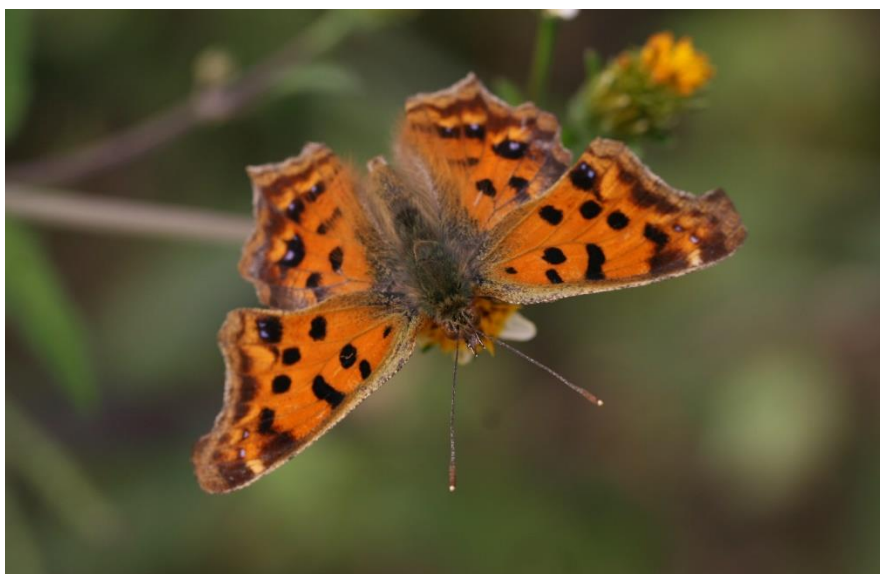
からだぜんたい き えだ うご
体全体が木の枝のようです。動き
もゆっくりで、まるで枝が揺れてい
るようみに見えます。

秋

こまがわ あき しゅやく なかま こまがわ
高麗川の秋の主演は、アカトンボの仲間です。高麗川では、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、ミヤマアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボの7種を観察できます。トンボでは、他にカトリヤンマやミルンヤンマなども運がよければ観察できます。

あき だいひょう なんほうけい まいとし
チョウでは、ウラナミシジミが秋を代表するチョウといえます。ウラナミシジミは南方系のチョウですが、毎年発生を繰り返しながら北へ分布を拡げていきます。でも寒い地方では、冬の寒さに耐えきれず越冬できません。それでも毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市では9月下旬から10月初旬くらいに姿を見せます。

ウラナミシジミ



キタテハ

なつ うか あき うか
夏にも羽化しますが、秋に羽化した個体の方が数も多く、さっそうとした感じます。成虫で越冬します。



ミドリヒョウモン

まいとしあき ^{すがた} 毎年秋になると姿をあらわし、
いつの間にかいなくなってしまう
ます。秋に産卵しますが、食草の
スミレではなく、木の幹などに
さんらん
産卵します。



ツマグロヒョウモン

このチョウを市内で初めて見たの
は、平成18年8月の坂戸よさこ
いの日でした。それ以来毎年そ
の数を増してきて、今では市内の
どこにでもいる普通のチョウにな
っています。かつて分布は関東よ
り南の暖かい地方と言われて
いたのに、いったいどうなってい
るのでしょうか？これも地球
温暖化の影響なののでしょうか？
(上がメス、下がオス)
春から発生を繰り返していますが、
秋に他のチョウが少なくなってきた
ときに、存在感を増すように感じ
ます。



アカタテハ



ヒメアカタテハ

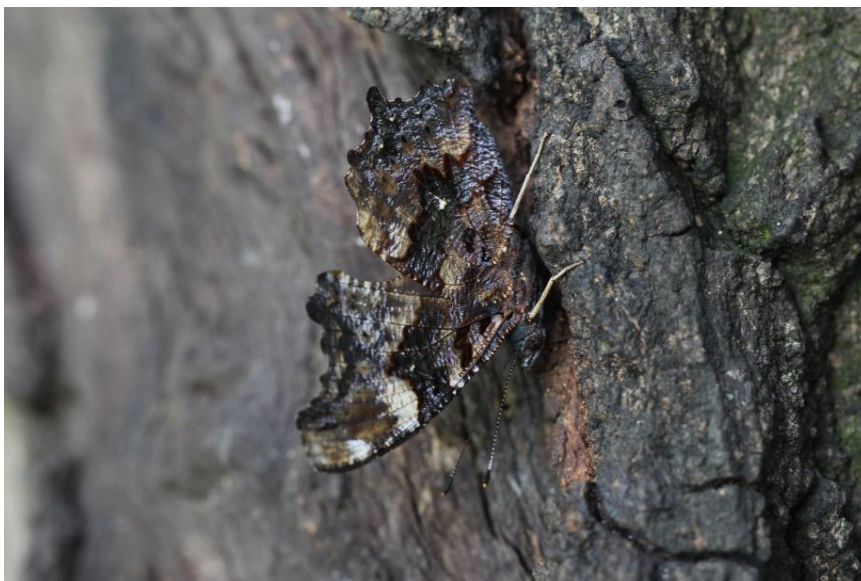


どちらも高麗川で普通に見られますが、アカタテハの方が見かける機会は少ないようです。



ルリタテハ

翅の表面がルリ色の美しいチョウですが、裏面を見てください。木の幹の模様になじみすぎて、なかなか見分けが付きません。クヌギなどの樹液によく集まるので、この保護色は結構有効かもしれません。





ウラギンシジミ

はね りめん なまえ ぎんいつしょく
 翅の裏面は、名前のとおり銀一色
 です。

おもて いろ ちが
 表はオス、メスで色が違います。オ
 スがオレンジ、メスは水色です。夏
 にも羽化しますが、秋の方がずっと
 めにすることが多いです。



ムラサキシジミ

ムラサキツバメ

ムラサキシジミ、ムラサキツバメともに夏と秋に羽化しますが、秋の方が個体数は多いようです。ムラサキツバ
 メは、かつては近畿地方以西の暖かい地方に分布していましたが、最近では坂戸市内でも普通に見られるよ
 うになりました。これもツマグロヒョウモン同様、地球温暖化の影響でしょうか？



マユタテアカネ



ミヤマアカネ



アキアカネ



ナツアカネ



リスアカネ



コノシメトンボ

こまがわ み 高麗川で見られるアカトンボの仲間、なかま この6種とノシメトンボがふつう み 普通に見られます。リスアカネとコノシメトンボはこたいたすう すく 個体数が少ないようです。しゆう あき ノシメトンボは、雌雄ともに秋になってもあか いろ 赤く色づきません。



カトリヤンマ

こまがわゆうほうどう ある
高麗川遊歩道を歩

いていると、いきなり

くさむらや木の枝から
草むらや木の枝から

すーっと飛び立つの
すーっと飛び立つの

で驚かされます。で
で驚かされます。で

も、すぐにヤブに入
も、すぐにヤブに入

り込んでしまうので、
り込んでしまうので、

写真を撮るのにはい
写真を撮るのにはい

つも苦労させられま
つも苦労させられま

す。



ミルンヤンマ

なまえ ゆらい
名前の由来は、イギ

リスの地質学者ジョ
リスの地質学者ジョ

ン・ミルン氏だそうで
ン・ミルン氏だそうで

す。高麗川ではあま
す。高麗川ではあま

り見かけないので、
り見かけないので、

こたいすう すく
個体数は少ないと

おも
思われます。



ふくがん いろ しゅるい ちが
トンボの複眼の色は、種類によっても違うし、オスとメ

スによって違うものもいて、様々な色に美しく輝い
スによって違うものもいて、様々な色に美しく輝い

ています。でも、残念なことに死んでしまうとこの輝
ています。でも、残念なことに死んでしまうとこの輝

きを失ってしまいます。
きを失ってしまいます。



シヨウリョウバッタモドキ

かんきょうがつかん
環境学館いずみのすぐそばの、
こまがわ ていぼう み
高麗川の堤防でも見つけられま
す。シヨウリョウバッタよりずっと
ちい と よわよわ かん
小さく、飛び方も弱々しい感じで
さいたまけん
す。埼玉県レッドデータブックで
じゆんぜつめつ き く してい
「準絶滅危惧」に指定されていま
す。



トノサマバッタ

なつ あき
夏から秋にかけて、シヨウリョウ
バッタや他のバッタとともに、
こまがわ ていぼう げんき と まわ
高麗川の堤防を元気に飛び回っ
ています。写真はオス、メスのペ
アですが、どちらがオスかわかり
ますか？
(答えは32ページ)



ハラビロカマキリ

オオカマキリやコカマキリととも
こまがわ かせんじき ていぼう
に、高麗川の河川敷や堤防で
ふつう み
普通に見られます。

冬

昆虫にとって、寒い冬は活動しづらく、ほとんどの種が活動を一時停止します。つまり冬眠です。その状態は

卵、幼虫、蛹、成虫とさまざまで、越冬対策も種によってそれぞれ違います。



ツチイナゴ

バッタの仲間は卵で冬越すタイプが多いですが、

ツチイナゴは成虫で冬を越します。

ゴマダラチョウ



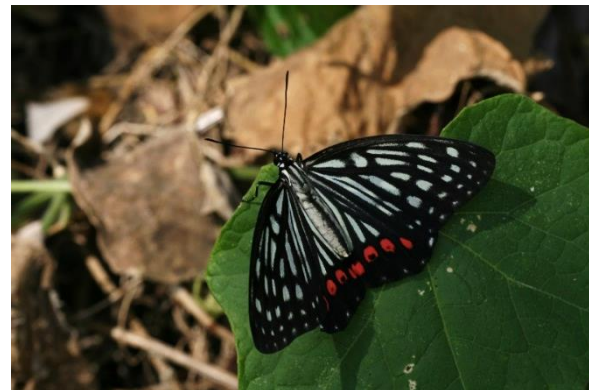
幼虫は、食樹のエノキの落ち葉にくっついて越冬します。



アカボシゴマダラ



ゴマダラチョウ同様、エノキの落ち葉にくっついて越冬します。



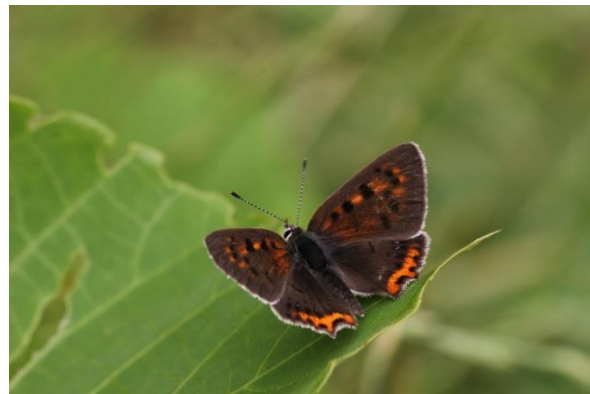
コムラサキ

幼虫は、^{ようちゅう}食樹であるヤナギの木の^{しょくじゆ}幹や枝の^き割れ目に、^き体^みを入り込ませて^{えだ}越冬^わします。ですから、^め探すのが^{からだ}非常に^{はい}困難^こです。^{えっとう} ^{さが}



ベニシジミ

幼虫は、^{ようちゅう}冬の^{ふゆ}間^{あいだ}ギシギシなどの^は葉^たを食べながら^{せいちゆう}成長^{はる}し、^う春^かに羽化^はします。



ナナホシテントウ



テントウムシの^{なかま}仲間は、^{せいちゆう}成虫^{ふゆ}で冬^こを越^しす^{しゅるい}種類^{おお}が多い^おです。

30 ページの^{こた}答え^{うえ}…上^{かぎ}がオス^{なかま}です。トノサマ^{ほう}バッタ^{からだ}に限らず、^{おお}バッタ^{しゅるい}の仲間^{おお}はメスの方が^お体^{しゅるい}の大きい^{おお}種類^おが多い^おです。



坂戸市環境学館いずみ

令和3年2月12日改訂